

少し秋の気配を感じる9月の北海道・千歳から今年の「まちライブラリーブックフェスタ・ジャパン」が始まりました。この取り組みは全国のまちライブラリー、私設図書館、公共図書館、書店など、本に関わる活動をされている個人や団体と一緒に、本を通じて人と人、人とまちとが出会う「本のお祭り」として2015年に始め、10年間続けることができました。

まちライブラリー@ちとせでは、前夜祭として「若者の本離れはほんとうか？」をテーマに大阪から来てくれた摂南大学の学生が、関西で個人がやっているユニークなまちライブラリーを紹介してくれました。その後、まちライブラリーのスタッフが、活字離れという従来のステレオタイプな情報ではなく別のファクトがあることを報告しました。例えば、飯田一史著『「若者の読書離れ」というウソ』（平凡社新書）によると、読書率は小中学生では2000年代以降V字回復しており、高校生は1960年代からほとんど変わっていないことや、大学生は2人に1人が本を読まないが逆に2人に1人は読んでいることを指摘しています。また永江朗氏の週刊エコノミストonlineの記事では、毎日新聞の長年の調査からも1955年頃からは70%台の読書率でその後変化はなく、20代の読書率は一貫して60代、70代より高いことを取り上げています。さらに経済産業省のデータ等では「出版業」「新聞業」指数はスマートフォンの影響で2008年以降急速に低下していますが、出版市場の規模は雑誌の売上は落ちているものの電子書籍等も含めると、2014年から2022年では市場規模は横ばい程度に推移しています。

また前夜祭では、地元の公立大学千歳科学技術大学の学生を交えて本を媒介としたちょっとしたゲームを実施し、両校の学生がまちライブラリー@ちとせの館内で「みんなの感想カード」がたくさんある本を集めて紹介しながら本に対する感想を語り合いました。

翌日は、市内のグリーンベルトと呼ばれる公園道路と清流がながれる千歳川のもとに持ち寄りりんご箱に思い思いの本やグッズを入れて本の世界を表現しました。ちょうど千歳の航空祭に併せた「空と川のOUTDOOR*FESTIVAL」の一環として実施したおかげで航空ファンはもとより、アウトドアファンがキッチンカーなどを目当てに多数来場されました。本に特化したイベントではありませんでしたが、多様な人が本が彩るアウトドア空間の楽しさや豊かさを演出できたと思います。

野外での本との親しみ方と言えば、8月に韓国の本のある場を調査した際にソウルの川辺や広場でアウトドアライブラリーを見ました。ドブ川を再生した清溪川(チョンゲチョン)の川岸に本とベンチを置いて自由に読書をするだけでなく、トークイベントも実施されていました。さらにターミナル駅からのアクセスが良いピョルマダン図書館では吹き抜けの商業施設の広場に10m以上の本棚に囲まれた空間が作られて観光客や市民が買い物ついでに立ち寄って飲み物を手に本を読んだり、談笑したりしていました。ガラス張りの巨大な屋内空間の手の届くところには一般の人が借りられる本があり、手の届かないところには本

に模したダミーの本が配架されていましたが壮観な景色でありました。

このように紹介すると、本を読んでいる人がどれだけいるのか、本は見えるものではなく読み、深く考察するものであるという声が聞こえてきそうです。ではスマートフォンは、本来は電話であり、電話としての用をなせばよいのになぜ高額な費用をかけて多くの人に利用されるのでしょうか？それは多様な用途に利用できるからでしょう。本来の目的から大きく離れた利用を前提として世代を越えて利用されています。ある時は仕事で、ある時は遊びや趣味でと生活の中の必需品になっているといっても過言ではありません。「生活の中の」という概念がなによりも大切な概念ではないでしょうか？振り返って本や新聞もかつてはそのような位置づけでした。ユルゲン・ハーバーマスがかつて「市民的公共圏」を定義づけたおりに本や新聞が多くの市民(ブルジョワ)が手にとれるようになり政治、社会革命が起こったことを指摘しました。「公共圏」という難しい言葉を使っていますが「生活の必需品」であり「生活を豊かにする環境」なのだと思います。本が単なる読書好きや研究者だけのものではなく、むしろ生活の必需品であり趣向品だと割り切ることで、もっと多くの人にとって本に囲まれる生活空間や環境が身近に見えてくると思います。肩肘はらず本のある環境を楽しむ、そのためには本棚を楽しく見せること、本を面白く紹介し、ただただ遊びの一環として活用することなど多様な利用方法や環境演出にも寛容であってもよいのではないかと「まちライブラリーブックフェスタ・ジャパン」の前夜祭で感じたのです。皆様も「読書の秋」には本を読むだけでなく、本を枕に昼寝をしながらさらなる夢を広げてください。

2024年9月

まちライブラリー提唱者 磯井純充

MSJ00657@nifty.com

【参考文献・データ】

- ・飯田一史『「若者の読書離れ」というウソ 中高生はどのくらい、どんな本を読んでいるのか』(平凡社新書、2023年)
- ・三宅香帆「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」(集英社新書、2024年)
- ・総務省「令和4年度版情報通信白書」
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/nf308000.html#d0308140>
- ・全国大学生生活協同組合連合会「第59回大学生生活実態調査概要報告」(2024年3月4日)
- ・浜島 幸司「読書習慣のない大学生の特性と傾向」武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要e Basis Vol. 9(2019.3)
- ・「増え続ける読書時間ゼロの若者」(「選沢」2024年2月号)
- ・経済産業省ホームページ「経済解析室ひと言解説・活字離れは本当か？」(2023年11月8日)
https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikaisetsu/hitokoto_kako/20231108hitokoto.html
- ・永江朗「出版業界事：72年も続いた読書世論調査があったから分かること」(週刊エコノミストonline、2022年6月24日)
<https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20220705/se1/00m/020/015000c>
- ・ユルゲン・ハーバーマス『第2版 公共性の構造転換』(未本社 1994年)



まちライブラリーに関する情報はこちらから

<https://machi-library.org/>

まちライブラリー通信 vol. 33 / 2024 秋号
発行：一般社団法人まちライブラリー
住所：〒540-0037 大阪府大阪市中央区内平野町 2-1-2 アイエスビル 3 階



まちライブラリーで「書く」活動 本やミニコミ誌発行中！

訪れた人たちが本を読むだけでなく、北海道と大阪では「書く」活動をしているまちライブラリーがあります。生活の記録や自己表現の場などとして利用者の皆さんに親しまれ、本やミニコミ誌の形にまとめて発表している様子をお伝えします。

(まちライブラリースタッフ・古谷綾、小野千佐子)



ちとせのイベントの様子



まちライブラリー生活史〜ちとせ編〜

20～87歳が執筆「まちライブラリー生活史〜ちとせ編〜」 9月発売

2023年4月、北海道千歳市の「まちライブラリー@ちとせ」(以下、ちとせ)で「書くまちライブラリー」と題した文章教室がスタート。その集大成として、全国で初めて「まちライブラリー生活史〜ちとせ編〜」(以下、「生活史」)を9月14日に発行しました。

文章教室の講師は、元北海道新聞記者で、道新文化センターのエッセー教室も担当している篠原明典さんです。エッセー教室の受講者がちとせを題材に書いた「大切な場所」(「生活史」24ページに掲載)を読んで来館し、まちライブラリー提唱者の磯井純充さんに出会ったのが縁で、「本を読むだけでなく、書く場にも」という考えのもと、月に2度の文章教室が始まりました。参加者はタイトルや文章の組み立て、結びの言葉選びに苦勞しながらも約400字で執筆を行い、仲間との合評や、新聞・地元のフリーペーパーへの投稿を楽しむ中で、着実に文章力を磨いてきました。

「生活史」には、20歳から87歳まで、総勢29人による51編が収録されています。執筆者は、千歳市内はもとより、恵庭市、北広島市から文章教室に足を運んでくださっているサポーターの皆さんです。収録されたエッセーには、北海道ならではの暮らしの様子、幼少期の貴重な体験、心が温かくなるエピソードなど、日々話題の中に、感動や気付きが描かれています。中には、学生によるものも。休学中に実家近くのちとせを利用した大学院生のまささんは、スタッフとの交流や参加したイベントを振り返って、「豊かな時間」「第二の実家」というタイトルのエッセーにまとめてくれました(「生活史」16ページに掲載)。タイトル

からも、ちとせに親しみを感じてくれているようです。

今後も書くことの楽しさを感じつつ、その時々感情を大切に作る皆さんと「書くまちライブラリー」を続けて参ります。この冊子化を皮切りに、各地にも書く活動が広がることを願っています。

大阪はミニコミ誌「HAMON」 個性豊かな作品、まちライブラリーのPRも

大阪市のまちライブラリー@もりのみやキューズモール(以下、もりのみや)では、毎月1回「作文カフェ」イベントが開催されています。主催は専門学校で小説の書き方を教えていた芝崎さん。参加者は小説やエッセー、自分史などをそれぞれのペースで書き進めています。そして、自分たちの作品の発表とまちライブラリーのPRになるミニコミ誌を創ろうと編集委員会が誕生し、2023年10月に「HAMON」第1号が発行されました。名前には、このミニコミ誌を通じて波紋のように何かが起こればという想いが込められているそうです。

毎回投稿している梶野さんは、各地のマラソン大会に出場するランナーとして知られています。10年ほど前のダイエットをきっかけに走り始めたそうで、食事とウォーキングからスタートした記録を連載しています。他にも、SFに特化した本のイベント「大阪 SF 読書会」を主催する泉田さんは、活動の様子を通じてSF愛を表現。また、参加者の視点からブックフェスタや、「まちライブラリー」の研究』出版記念トークイベントの報告を掲載したり、スタッフのおすすめ本を紹介してくれたり、情報満載のミニコミ誌となっています。

書く活動によって、もりのみやを強力にサポートし、集う様々なみなさんの個性を表現する場になっています。

◇まちライブラリー生活史〜ちとせ編〜について

ISBN 978-4-908696-06-0

2024年9月14日発行 A5判 32ページ 500円(税込)

購入は、まちライブラリーストアから

(<https://machilibrary.stores.jp/>)

オンライン購入時に「ちとせ館内受け取り」を

選択することもできます。



◇HAMONについて

まちライブラリー@もりのみやキューズモール

のサイトに掲載

(<https://machi-library.org/where/detail/563/>)



大阪でツアー開催 まちライブラリーを巡って、まちの魅力発見!

ブックフェスタ・ジャパン2024企画

全国各地にまちライブラリーが1100件以上誕生しています。

訪問すると、そのライブラリーならではの蔵書があり、オーナーたちの個性を感じることができます。

オーナーと少し話せば、近所の何かをおすすめしてくれ、そのまちの魅力に触れるきっかけになります。

知っているまちにも必ず発見があります。そこで、ブックフェスタ・ジャパン2024では「探訪ブックスポットを巡ろう!」と題して、まちライブラリーや図書館、書店など本に関わる活動をしている場所を訪問しあうことを呼びかけました。

小さなまちライブラリーがたくさん点在している大阪市では、まちライブラリーオーナーや地域のことに詳しい方が案内人となり、5ルートのまち歩きツアーを実施しました。(まちライブラリースタッフ 小野千佐子)



空堀ツアー



天満橋ツアー



北浜ツアー

まち歩きツアーは、近代建築が多くあるビジネス街の北浜ルートからスタートしました。訪問中も利用者の出入りが続く「まちライブラリー北勝堂」では、子どもの利用が多いため絵本や児童書の蔵書を増やす努力をしており、オーナーの人文科学系の蔵書は倉庫へ押しやられているそうです。「まちライブラリー@シュール・ムジュール デサキ」からの中之島と土佐堀川の眺めは最高で何時間でも読書をして過ごしたい空間でした。ランチも兼ねて訪問した「まちライブラリー@絵本カフェ&パー Conteur」では、仕事終わりに一人で気軽に立ち寄れる場所を目ざしていると話してくれました。最後は独立系書店のスタンダートブックストアが屋台形式で月に1度出店する川沿いの公園へ。イチオシの本ばかりが並ぶ小さな屋台では店主との対話が重要な要素なのだとか。

次のルートは、大阪市内でも独特の雰囲気がある生野区。古くから在日韓国・朝鮮人が多く住み、近年は様々な国や地域にルーツを持つ人々が増えてきています。「大阪市生野図書館」「いくPAの図書室〜ふくろうの森〜」「KOREAN BOOK CAFE ちえっちゃんり」にはハングルをはじめ多言語の本と人権に関する本が多く所蔵されていました。スタッフやボランティアで関わっているみなさんの多文化理解への熱心さに敬服しました。「まちライブラリー@幸教寺」は本堂の奥に居心地のいい静かな場所を提供。「生野長屋大学ぼんぼキャンパス」にはボードゲームがたっぷりあって、ゲームを通じて世代を超えて人と出会うきっかけを提案していました。

三つ目は工業地帯として発展し、今では住宅地が広がる城東区です。「まちライブラリー@古本たまや」の村上さんが手作りで用意してくれた資料を片手に、大坂冬の陣の古戦場も散策しました。途中の商店

街では、通りかかった92歳の魚屋さんに戦後の闇市の様子を聞かせてもらうこともできました。おしゃべり禁止の「ホンのジカン」の見学では、一人になれる時間や空間も大切であることを体感しました。

四つ目は、大阪城周辺の官公庁や病院・学校が多く集まる天満橋です。大阪の歴史と文化を中心に広く歴史に関する情報・図書を集めた「なにわ歴史塾」や、女性関係の情報を集めた「ドーンセンター情報ライブラリー」、出版社が運営し、市井の人々の様々な病とのかかわり方をテーマにした「闘病記の森」を巡り、特定のジャンルや専門性に特化した図書室を通じて、これまで知らなかった世界と出会うきっかけになりました。

最後は、大阪大空襲を辛うじて逃れた細い路地に長屋が連なり、作家たちの足跡があちらこちらに残る歴史ある空堀エリアです。「空堀シネマライブラリー EndMark」には映画のパンフレットがずらりと並び、映画館のイスに座って読むことができます。路地の奥にある「書肆喫茶mori」は海外漫画専門の漫画喫茶で、カラフルなバンド・デシネやグラフィック・ノベルにツアー参加者は驚いていました。「の君に本を」も「さるやみ堂」も個性的なオーナーの小さな書店。この地域には他にも個人で営む店が多く散策を楽しめます。

まちライブラリーを拠点にしたまち歩きや、まちライブラリー訪問を目的にした旅も楽しいのではないのでしょうか。お試しください!

◇大阪まち歩きツアーの詳細は、こちら

<https://machi-library.org/what/detail/10378/>



New! まちライブラリーの紹介

NO. 1127 (北海道 千歳市)

陶光文庫@りんご箱プロジェクト

北海道内外の陶芸・美術・クラフトの本を中心に集めたりんご箱ライブラリー。当館のリプライズで気になる本があったら、メールでお知らせください。まちライブラリー@ちとせで閲覧・受け取り可能です。

- Instagram: toko_furuya
- オーナー: 古谷綾

NO. 1133 (東京都 杉並区)

キッズ英語文庫

赤ちゃん絵本から中学生までの英語の本、自分のために読む絵本、易しい英語の本などをそろえています。本好きな方のおしゃべりも楽しんでください。

- オーナー: 桑田規代

NO. 1140 (長野県 伊那市)

本と駄菓子と、、、それぞれ

元紙屋さんの空き店舗を改装して、駄菓子屋さんと同じまちライブラリーを始めました。こあがりがあるその物件で、小学生や地域の人がちよっと上がり込んで本を読む。そんな日常を作りたいです。

- Instagram: sorezore2024
- オーナー: 平賀裕子

NO. 1144 (京都府 京都市伏見区)

どんぐり図書館

自宅の前の小さな本箱に、いろんな本を少しずつ並べます。散歩の寄り道スポットとして、時々覗いてみてください。

- Web: <https://machi-library.org/where/detail/10024/>
- オーナー: 山本かおり

NO. 1147 (京都府 京都市山科区)

コミュニティスペース106

団地を中心としたまちづくりプロジェクトの拠点です。隣の107号室はコミュニティカフェを運営しています。小さな企画も行いつつ、「共に楽しく生きる」場所になったらいいなと思いながら活動しています。

- Instagram: kyoto.fukushi
- オーナー: 京都福祉サービス協会

NO. 1148 (大阪府 堺市)

まちライブラリー@泉北BASE

泉北BASEの2階、太陽の部屋を図書スペースとして開放。絵本や児童書、漫画など子ども向け書籍を中心に市民の皆様からご寄贈いただいた本を配架しています。どなたでも自由にご利用いただけます。

- Web: <https://www.senbokubase.shijuku-fs.org/>
- オーナー: 特定非営利活動法人志塾フリースクールラシーナ

NO. 1150 (大阪府 大阪市都島区)

まちライブラリー@tsukifune.

絵本と手紙をたしなむ、隠れ部屋みたいなこじんまりしたお店に毎月テーマにそった本や絵本を7、8冊置いています。ゆったりと自分時間を味わってくださいませ♪

- Web: <https://www.akizukishiki.com/tsukifune>
- オーナー: 秋月徳希

NO. 1151 (静岡県 浜松市)

みどりの牧場

ショートステイの中にある小さなライブラリー。介護関係や読むと温かい気持ちになれるような本、絵本、工作本などをご用意しています。スペースに展示できる本がわずかなので、随時入れ替えしていきたいと思ひます。

- オーナー: 清水妙美

NO. 1152 (東京都 渋谷区)

マンガカフェ#しぶにじ

月1回開催する「マンガカフェ#しぶにじ」の一角に、まちライブラリーの本棚を設置します。恋をする相手は異性だけ? 「女らしく」「男らしく」って苦しくない? LGBTQやジェンダーにまつわる人気マンガ読み放題!

- オーナー: 渋谷インクルーシブシティセンター<アイリス>

NO. 1154 (東京都 町田市)

グランダ玉川学園

眺めの良いエントランスでお気に入りの本と出逢いませんか? 本を介して人との出会いが生まれ、つながり、輪が広がっていく、そんな空間を大切にしています。

- Web: https://kaigo.benesse-style-care.co.jp/area_tokyo/machida/home_gd-tamagaku
- オーナー: 山本有紀恵

NO. 1155 (兵庫県 丹波市)

谷川駅待合室 ちーたん文庫

福知山線と加古川線の乗り継ぎ駅、谷川駅。待合室にほっとできる空間を作ろうと、ささやかな文庫を設けました。大人向けの本、コミック、子ども向けの本などいろいろあります。駅を使わない方も利用できます。

- オーナー: ちーたん文庫FRIENDS



NO. 1158 (北海道 岩見沢市)

Mahalo nui loa

家の前にはちいさな巣箱を。たまに移動して本箱をどこかに置いて。本を通じてつながりたいと思ひます。

- Instagram: raiburarii_mahalo_nuihoa
- オーナー: 福田啓子

NO. 1159 (山形県 金山町)

まちライブラリーMOYA

もがみの町・金山の杉香る住宅のリビングルームや軒下、芝生で読書を愉しむ期間限定の私設図書館です。文芸書、アート本を中心に書籍600冊、レコードを用意しお迎えいたします。

- Instagram: machi_library_moya
- オーナー: MOYA Kaneyama



NO. 1163 (岐阜県 岐阜市)

かがしま絵本館“いっばい”

西岐阜駅近くに絵本館をオープンします。幼児向けを中心に、絵本の楽しみを“いっばい”にしたいと思ひています! 絵本好きな子(人)集まれ。いっしょに楽しみましょう!

- オーナー: 小澤純子

NO. 1164 (大阪府 大阪市東成区)

まちライブラリー@Relax+

整体院の待合スペースに併設されたライブラリーです。整体のご利用のない方も気軽にお立ち寄りください。歴史関係、歴史モチーフの小説、プロレス関係、世界の闇、政治の裏側、漫画、健康・医療関係の本が多いです。

- Web: <https://relaxplus.jimdofree.com/>
- オーナー: 河上勝志

NO. 1166 (岐阜県 大垣市)

みちくさのみつきち

岐阜県大垣市墨俣町にある古民家で、本のある場所を開いています。こども達の放課後の場所としても開放し、小さな駄菓子屋さんやおすそわけパントリーも常設しています。どなたでも一息つきにいらしてね。

- Instagram: michikusakai
- オーナー: 沖田麻理子

NO. 1167 (大阪府 大阪市平野区)

まちライブラリー YOZORA LABO

大人も子どもも、ワクワクを共有できる居場所を提供。疲れた時は、楽器を奏でたり、コミックを読んだり、ゴロンと横になってリラックスすることもできます。そんな自由で心地よい空間を提供することを目指しています。

- Web: <https://yozoralabo.com/>
- RIBAKO合同会社